



飼い主の責任

わたしたち人間は、なぜペットを飼うのでしょうか。
新しい家族を作りたいから？
子どもが一人っ子だから？
夫婦二人きりだから？
理由は人それぞれ。

飼われるペットは「この家族でよかった」と思っているのでしょうか。
今月は、飼い主の責任について考えます。

言葉を越えるきぎずな

愛くるしい仕事、まつぐな眼差し、おちゃめなイタズラ...
家族をハッピーにしてくれたペットたちの「言葉を越えたきぎずなストーリー」

小学3年生のころから「犬を飼いたい」と言いだした凜。犬を飼えば、餌もやらなきゃいけないし、散歩だってしなきゃいけない。「自分で世話するから」と言うけど、本当に面倒が見れるのか心配で。1年ぐらい様子を見ました。その間、下の子の面倒をちゃんと見るようになり、少しずつお姉ちゃんらしくなってきたので、マラソン大会で「10位以内に入ったら飼おうね」と約束しました。結果は11位。約束は約束なので、しばらくは飼わずにいたのですが、凜

娘を成長させてくれたチップ 家族になってくれてありがとう

の生活を見ていて「これなら飼える」と思い、昨年7月にチップを迎えました。チップは娘にたくさんの成長をもたらししてくれました。凜はチップの成長を写真とコメントで紹介する「チップノート」を作り、朝夕の散歩を欠かしません。チップを弟のように可愛がり大事にする姿を見て、わたしたちも子どもたちを大事にしようと思いました。チップと出会えたこと、家族になってくれたことに感謝しています。



渡部淳二さん まゆみさん
凜ちゃん 夢ちゃん チップ <徳丸>



岩城賢治さん 美奈子さん
ジーク <新立>

可愛がっていた愛犬が死んでしまい、さみしい日々を送っていました。そして迎えたのがジークです。この子はやんちゃな半面、すごく甘えん坊で。さすってくれさすってくれて熱烈アピール。でも可愛がり過ぎないように気をつけています。自分のおもちゃじゃないから。命があるものだから。ジークが来てから、我が家はにぎやかになりました。甘えん

やんちゃな末っ子ができ、我が家はにぎやかになりました

わたしたちの生活に潤いを与えてくれる犬たち。愛くるしくてかわいい犬を、家族の一員として迎える人が増えています。一方で、その習性を知らずに、ただ「かわいい」というだけで飼いはじめ、つなぎっぱなしで放置する人も増えているという事実があります。

飼い主のモラルの欠如。これにより、今、役場には犬の放し飼いやフンの後始末、猫への無責任な餌やりなどに関する苦情が多く寄せられています。こういった問題は、動物が被害者に見られがちです。しかし、根本的な原因は、飼い主にあるのです。

また、犬や猫の習性を理解しようとしなくて飼いはじめ、「問題行動を行うようになった」「飽きた」と簡単に飼育放棄するなど、動物の命を無視した無責任な行動が後を絶ちません。5,563匹。

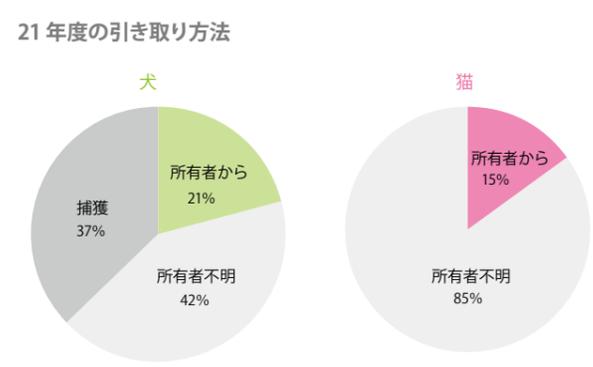
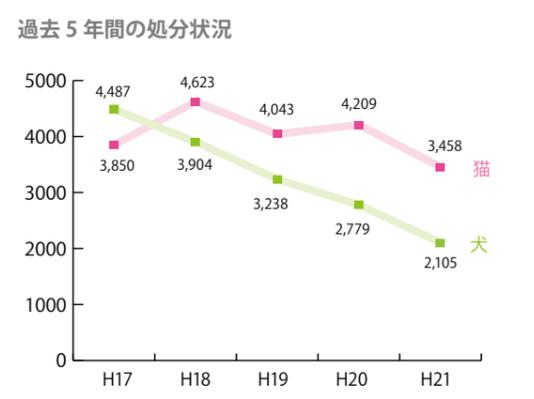
これは、平成21年度に愛媛県で処分された犬と猫の合計数です。多くの犬猫が愛され育てられる一方で、こんな現実があるのも事実です。前ページで紹介した2匹の犬も、実は一度は心無



処分を待つ子猫たち

全国で年間30万匹、愛媛県で5,500匹の犬猫たちが処分されていることを知っていますか？

知ってほしい 幸せに暮らせなかった犬や猫たちのこと



い飼い主から見放された経験を持っています。しかし彼らは、愛媛県動物愛護センターの譲渡会を通じて新しい家族と出会うことができそうです。といっても、このように救われる命は、ほんのごくわずかなのです。譲渡会は月に1回。1回の譲渡会でもらわれる数は十数匹程度。譲渡会を通じて新しい飼い主が見つかるのは、犬で約5%、猫ではわずか1%にすぎないのです(※)。その他は、センターにおいてその生涯を終えるこ

とになります。犬や猫はおもちゃではありません。可愛いだけでは飼えないのです。彼らは生きています。餌を食べれば、トイレもする。病気になったり、ケガをしたりすることもあります。寂しければ鳴くし、甘えてもくる。相手と気が合わなければ闘争態勢に入ることだってあります。つまり、人と同じように感情があるのです。だからこそ、毎日の世話が欠かせません。飽きたから、面倒だからと、それを放棄するわけにはいかないのです。

※愛媛県動物愛護センターにおける過去4年間の収容数の平均と過去4年間の譲渡数の平均から算出

現実を知って、
みんなに考えてもらいたいことがある。

処分の現実 命を預かる重みを 感じてほしい

「今日、皆さんに犬をお譲りする前に、この愛媛県動物愛護センターの業務内容をお話ししたいと思います」

8月14日、8月の譲渡会の事前講習の冒頭、職員の木村琴葉さんはこう切り出しました。

「なぜ業務内容をお話するかと言うと、愛護センターにいる動物たちがなぜここへ来ることになったのか、そしてどうなるのかを知ってほしいからです。そして、こ

の現状を愛護センターについてよく知らない周囲の皆さんにも伝えてほしいのです」

そう譲渡希望者に語りかけ、木村さんは講習会を進めました。毎月第2土曜日に行われる譲渡会。飼い主希望者は事前講習会を受講しなければ、愛護センターから譲渡する動物の飼い主になることはできません。

「動物愛護センターの業務は大きく2つに分かれています。一つは犬や猫を飼っている方、またこれから飼いたいと思っっている方へのアドバイス、譲渡会や各種イベントなどを通じて、人と動物が上手に共生する社会を目指した啓発活動で、これを『愛護業務』といいます。もう一つは飼えなくなつた、または飼い主が不明な犬猫の収容・処分、動物取扱業に関すること、危険な動物に関することなどの業務で、これを『管理業務』と呼んでいます。

一見、この二つの業務は相反するものに見えますが、実は根幹でつながっています。愛護センターに収容される犬・猫の中には、飼い主の動物への知識・理解が足りないことが原因というケースが多くあります。こういった処分などの悲しい現実を伝えることで、誰

もが命の重みを再認識し、愛護センターにくる動物たちを減らすということにつながるのです」

動物たちが愛護センターに連れてこられる理由はさまざまです。木村さんは数枚のスライドを見せ、それぞれについて説明をはじめます。

「このおしめをつけたワンちゃん、『私より先に逝くのを見たくないから』と高齢の方が引き取りを希望されました。誰も知らない、どこかも分からない、冷たい場所で命の終わりを迎える辛さはどれほどでしょうか。それから、次のこのワンちゃん、『こいつは飼い主の言う事をちつとも聞かないバカ犬だ』と引取られたワンちゃんです。『処分されるんですよ、良いのですか』との問いに『いらん、いらん』と言ひ、『ご自分で犬房に入れてください』と案内すると乱暴に放り込む。これだけでも信じがたいのに、帰る途中で譲渡用の子犬を見て『かわいいう、これくれんか』と。たった今、自分の犬を見捨てたばかりの飼い主が、新しい子犬を欲しいと言ひ出したのです。この写真をいつも使つて説明するのは、こういう事実を知って、皆さんには決してこのような飼い主にはなつてほしく

ないという強い思いがあるからです」と締めくくります。

「このように、譲渡前講習会では、日々、愛護センターで起こっていることや辛い処分についても伝え、飼い主になる責任を強く訴えています。命を預かる重みを感じてほしいという職員の強い気持ちがあるのです。」



命を預かる重みを訴える講習会



譲渡会で新しい飼い主にもらわれていく

このセンターでの犬猫の処分は、毎週火曜日と木曜日。収容期限が過ぎると、二酸化炭素ガスを送り込んで処分が完了します。

子猫は専用の小さな箱で、猫は専用の箱に入れ、仕切りの入つた専用の処分機に箱ごと納めて子犬と一緒に処分されます。ガスが注入され、全てのボタンの点滅が消えると、扉を開け、二つの箱から遺骸を取り出します。搬送車に積むと、制御室の隣へ。

搬送車に重なる複数の遺骸。触れると、まだ温もりがありました。命が、そこには確かにあったのです。

成犬は、犬収容室から誘導通路を通り、追込み機によって処分機の中へ。密閉された処分機に二酸化炭素ガスが流し込まれます。制御室のモニターには、ステレンスの処分機にいる犬たちの様子が映し出されます。息絶え、折り重なつた犬たちの姿。

「窒息して死んでいくんです。わたしたちは安楽死という言葉は使いません」堀内道生係長は、そう静かに話します。

ガスが抜かれ、制御室のすべてのボタンの点滅が消えると、処分機の扉を開けます。犬たちの遺骸に ついては首輪を、二つ丁寧にはずすと言います。



犬収容室からの誘導通路



制御室に置かれた操作ディスク盤。成犬の処分はこの部屋のボタン一つで行われる



モニターには処分の全てが映る

センターに集められた犬たち。その数は1年間で約2千匹にのぼる



処分が終わってはずされた首輪。45リットルのごみ箱が1カ月半でいっぱいになる



遺骸が運ばれる焼却炉



800度で、小さな命は焼かれていく



人間の無責任な行動の果てに奪われたたくさんの命が供養されている慰霊碑

「まだ新しい首輪をつけた犬や猫もいます。首輪に犬の名前を子どもで可愛らしく書いているものも。きつと飼い始めたときは家族そろつてニコニコして付けてあげた首輪でしょう。なのに、はずされるときは大好きだった飼い主ではなく、わたしたち職員の手ではずしてあげられます。首輪をはずす度に、こんな命があつていいわけがない、ペットの首輪は、見ず知らずの人間でなく、最後まで大事に育てた、そんな飼い主に悲しまれながら外されるべきものだと感じています」

それら遺骸はみな同時に焼却炉に運ばれ、燃やされる。焼却炉の温度は摂氏800度。真っ赤な炎がみるみるうちに全身を覆い、メラメラと燃え上つていきます。

「文句を言うこともできず、処分された犬猫たち。これらの動物の声を伝えていくことが、わたしたちの使命であると思っています」



愛媛県動物愛護センター係長 堀内 道生さん
Horiuchi Michio

飼うことの本当の意味

愛

護センターに運ばれてくる犬・猫を1匹でもなくすることが必要と堀内係長。「犬、猫は十数年生きます。飼いは始める前に生涯愛情と責任をもつて飼うことができるのか、しっかり家族全員で話し合っておくべきです。命ある動物は決して『ものではないのです』」

また、飼ひ方の失敗で途中放棄につながることも。

「ほえる犬、かみつこうとする犬、実は『恐怖』が原因になっていることが多いのです。わたしたちの生活する社会には、犬にとつて刺激がたくさんあります。それらが『恐怖』にならないように慣らしてあげることが大切です。犬をしかつてい人がいます。本当に犬は分かっているのでしょうか。しかつたつもりが、犬には『相手にしてくれた』と感じさせるご褒美になってしまっていないませんか？ 飼ひ主さんと犬との相互認識の違いが途中放棄につながっているとしたら本当に残念なことです。」

最近では純粋犬種を飼う人も多くなってきました。犬は犬種によって

特徴があります。また、犬ごとに個性も違います。飼ひ主さんはしっかりそのことを理解して『しつけ』をしてください」

犬

は飼ひ主さんなしでは生きていきません。しつけも繰り返しなければ忘れてしまいます。犬との信頼関係をしっかりと築きながら愛犬との楽しい生活を満喫してください。けれど、甘やかしてばかりではいけません。飼ひ主さんがしっかりリーダーシップをとりましょう。食器は出しっぱなし、おもちゃは与えっぱなしはいけません。犬は飼ひ主の行動を読む天才。時には散歩も違った時間、違ったコースに行ってみましょう」

愛護センターでは、犬のしつけ教室を行っています。

「毎週第1日曜日に行っている『子犬のしつけ講座』では、子犬の時期に特に行つてほしいしつけについてお話しています。大きくなつて、問題行動を起こすようになってからの対処は大変です。しつけで失敗をしないためにも大勢の方に参加していただきたいです」

寄

せられる苦情が多いのが猫への無責任なえさやり。「このことが不幸な命を増やす原因にはなっていないでしょうか。センターに運ばれる子猫の数は繁殖期には非常に増えているのです。飼ひ猫は『室内飼ひ』してほしいとセンターでは話しています。室外は交通事故始め飼ひ猫にとつて非常に危険が多いからです。不幸な命を増やさないための不妊・去勢手術は繁殖抑制のみならず、生殖器系の病気の発生が少なくなるなどの効果もあります」

町には不妊・去勢手術に対する補助制度があります。詳しくは町民課生活環境係(☎985-4117)へお問い合わせください。フンの後始ができていないことも苦情の一つ。

「最近は大分マナーもよくなってきましたが、未だに放置されていることも。フンの放置は見かけの汚さだけではなく衛生的にもよくありません。こういった放置されたフンから愛犬が病気に感染したり、場合によっては人が感染したりすることさえあるのです。散歩を排泄の機会ととらえるのではなく、しっかりと家で済ませてから出かけてみませんか。愛犬との散歩がより楽しいものになることでしょう」

家族になってくれてありがとう



猫は室内飼ひをしましょう。外に出れば、病気になったり、交通事故にあつたりする確率が高くなります。妊娠する可能性も、犬も同じですが、不幸な命を増やさないよう、不妊・去勢手術をしましょう。手術は30分～1時間で終わり、安全性が高いです。少し太りやすくなるというデメリットがありますが、子宮や卵巣の病気にかからなくなるというメリットも。それから、飼ひ主は予防をしてあげてください。狂犬病予防注射は義務ですが接種率は約7割。もし日本に狂犬病が入ってきたら、接種率が7割以上ないと感染拡大を防げないという説もあります。ペットを飼うときは、餌代だけでなく、病気になった時にお金がかかることを忘れないでください。



かむら動物病院 獣医師
嘉村 精一さん
Kamura Seiichi

家は猫が5匹、犬が4匹います。3匹は捨て猫。犬も1匹は捨て犬で、1匹はわたしが勤めるペットショップに置き去りにされた犬。最初から飼えないなら飼わないことも愛情だと思います。飼う人は、将来をしっかりと考えてください。飼っている人は、ペットのことを一番に考えてあげてください。言葉が話せない彼らのサインに、飼ひ主が気付いてあげてください。ペットは家族です。



愛媛県動物愛護推進員
西岡 芽衣子さん
Nishioka Meiko

可愛い子犬も、やがては年をとります。老犬になれば介護が必要な場合も。人間より寿命が短い、そこには凝縮された『一生』を見ることができません。

犬と暮らしたいと思つたら、まずは「かわいいペット」ではなく、「命のある生き物」だということを認識しなければなりません。必要なのは、命を預かり、責任をもつて一生を見届ける意識と覚悟。

それができたなら、目いっぱい愛情を注いであげてください。彼らが「この家族でよかった」と思えるように。ペットには飼ひ主しかいないのです。

なぜ犬や猫が処分されなければならないのか。みんなで考えなければならぬのです。

消えていく命があるということを知ること、考えること、伝えていくこと。目の前の命を大切にすること。わたしたちができることはたくさんあるはず。